めうの

下

中村俊定文庫
文庫 18
804
2

蓬の文庫

## 雪見塚

すみだ川長命寺より宝暦三年十月抵徳院
抵唐桃院こまをとゝ花は碑のと翁堂の門碑
なりしを今の堂ひらひて碑はみなもり又昔
堂のあとなりし梅ちしとて林中浅黄さくら
一ときはなりてとりし花ばらさかりなるまゝ

京都帝国大学図書館
像宝蔵

ゆく春やとよ爪ばと爪ら丸雪の跡　京　雪雄
神雪やとと花とり降てとゝ繁るき　伊勢　横堂

雪花人雪のんてゝてゝり　播津　一草

るゝ雪ゝきて炭をゝ翁の影　南井

初雪や深閑のそゝの初ゝり　不及

ゝ花ゆきゝとりゝて義の　詠夜

はらゝとも波ゝゆゝゝれ芦　諸山

外ゝり戎ゝ乗ゝ雪の宿　伊勢　昌作

蓑の雪ゝゝまゝの多ゝゝゝ　京　南路

一ゝ落てちゝゝと紙ゝり鉢の雪　武蔵　天年

ゝる雪ゝ拍子の抜ゝゝ小槌の影　出羽　国村

山椒の尖ゝる雪のゝゝゝりゝり　安芸　牧子

雪のゆきゝゝゝゝゝを吹ゝゝぬ　甚堂

家ゝゝゝる夜の学ゝ本ゝゝゝ遠雪　宇橋

## 涅槃塚

すゝゝゝ川木母寺ゝゝの此塚ゝちゝきゝゝ紀伊国

屋ゝりとゝりゝゝの祖翁隠後のゝゝゝを世ゝる

涅槃の圖に擬して物の人はのしめ者ものの
ものおもはまつ〳〵たゝものの形くるりて後孔
りこゝやしき分をきてこのつゝて陰雅に成ろう〳〵
物りの事を家まりて此所後の物〳〵む
ちゝに此碑をいるるあてゆりとるんいと殊勝のるこ

塘をやる 鳴を拾く柳 車雨
米庄寒ん〳〵れる柳の形 菜静
枝をて兼おるあり〳〵やるきり 安藝 玄蛙

正月のはるゝ北うるる柳うる 川嶠
うねひとゝ物に柳ゆまて〳〵 桃江
柳ふるんきをゝう 瀧月 肥後 佛翁
月ありて寒き柳の本向うる 紀州 芳百
ひたゝりとゝるるの柳 倶 百北
青柳に寒りるる路うる 右雄
青柳中是這に葉に垂そめる 京 梅價
二月の小口に柳らゝやるきり 一崎

柳ゆゑ物思ふ人のかよひけり　京　扇景

見そめて柳よくとやなびくらん　季石

夜ふかく入て白しと本岡の雪見をる　雪史

なる藤塚の松よりうつり行乳山　史千

柳なる鶯の格場わたりやそよぐ　碩房

春の日の光長閑出て居り偶田川　完来

百里遠て路よ遠やゆく人の　出羽　恕雲

志を待ひとりよりとりとり　赤城　葛三

咲てまたてゝ咲てゝ咲てやすやすと柳　陸奥　弓年

ちよいと出て又日の暮り柳ゆゑ　倶利　尚古

春のひとり出て白くちるところ　大阪　六雪

ちる事きてるる日の照るところ　伊勢　推己

小かとよ行てゝ柳ちる所本の方　陸奥　十竹

よくち祇んとまつ迄柳ゆゑ　越後　石海

罪ゆゑ夢の中ゆく歌を食　駿河　恵牛

雲水のまとりとあるところ　伊勢　省吾

さくら山のてりかゝやきて花又月　岸花

旅ゝ見まして夜歩のまてゝ花　居律

旅人と見ゆる花の尾りらけ　お掬　雑吟

ひらゝ来て出てゝるまゝ鶯、　豊女

有明の井よりてゝるさてゝ、　捨子

三月の橋又きまてゝこの形　武義　蕉仮

ちまたちの盛りの桜ゝ　遊賞

不見花波花ゝのちゝ日よりの又危　小路　茅丸

三首

金波橋

山峰の消て迷ゝ雪の水　蕉笠

春翠又ゝ来ゝ出ゝ冊のちゝ　菜静

今宵夜をいたゝて夜ゝ　宇橋

冬菜塚

浅草新堀端浄念寺ゝ有り寛政七年十月十二日

旬翁庵五陵門人安長建之

濃紙星をうつすひかりや炭すまる　左節

芒穴の月をさそふのほしめりて　信濃　雲帯

華見めてうたてる紅ちりそめる　伊豆　宵鱗

ものいふ仏と組てゝ居てゝ　但馬　風樹

枕ゆる見らぬ木魚や冬ごもり　京　百池

冬ごもりの年よりの人の寄て　能登　秋丹

只物ふ人ゝ花ちりゆくうわ　播磨　松渓

二つ花月の雑ぶてよいこのけふ　長門　羅風

冬音の汁ちまきさそ乳ぶり　丹後　三芳

雪ちりてゝ雪ちりてゝ冬の芽　桃栗

炉ごろ乳ぶりや松りを乳ぶ　近江　五来

冬ごもりの花ちり雪乳ぶ　梅裏

乳ぶるひきの朱や夜の雪　玉芳

ふゆの夢やの花ちる米ちり　但馬　鬼松

百と月乳冬の夜夢ふ梅ちり　伊勢　観一

立消のすゑ火櫛の月　台〻

まち新し火櫛の自ゝ蘇とめず　宇橋

物の雪れ月まを仙ゝ炭團の形　但馬　柳百

冬の月柱ばかりの木蔭ゝ郷　南和

ありやうやはきまを野ふるゝの鏡　但馬　夕雨

松風や此蒼天を冬れ入　京　千崖

冬菊れ林を指ゝ思ふゝ　但馬　風雪

冬ゝ冬の鎌ゝ冬ゝいまた根、　雪天

寒き冬くゝ外ゝ出て出て新雀ゝ乳、　梅午

ゝゝゝゝて煤三石れ冬浪ゝ　柳也

煤竹のとゝゝゝるや月のゝ　お梅　蓬室

月とゝゝ月ゝ八ゝ月ゝ出て冬師走ゝ　菜静

物ゝけゝ冬梅や師走の冬月ゝ　亀城

冬竹の光蔭ゝ冬ゝゝゝ　皆奥　雪二

石搗場

浅学欄毒の後林より

## 花雲塚

四新の名所の文化六年三月菜窓菜英建之
翁と宗因其角の句をかりて

花さくらのんさくとすきハはるの滝　久蔵
花ぬすむ夜のたわむれやうんの梦　播州　文郷

花の雲ちるかとうん焼ゆうりかわ　信濃　一葉
さ花茶ゆうりてたしや寺の傘　彩羅
新ふ所のて神花ちる水田ゆう　一肖
物ものとよ　花ふみしゆうものきま　孤山
ととすまもハたなのまきて家ふれ　仏魯
ちまてうちたうみて新ふの新日ゆ　右水
きのふとてきを不花さうう　京　芦錐
月花てたる明日本ゆの新うう花　淡路　冬柱

月夜うけて花のてとなきこねりこねり　陸奥　平角

灯とまさぐりまとやまむ夜の花　紫静

立てまし本のうやうやしく見ぬの川　宇橋

松ヶ崎や我も花見の花ぐもの　箱館　来車

咲くり乳花の雪吹のなかなる　仁徳　環如

ちぢれ花ひろこうてうてうめ　陸奥　あよ女

ちまたちまちまちまち成し花見哉　長崎　雲居

見ぬふりして花ちるゆふべ　筑前　二堂

掃とはてちらぬ花の庭　尾張　東陽

## 翁塚

上野の国北小不忍池洲ヶ崎文化中皇寿坊信我
建之此信我を東都の獅子つの一名人なるべし

白蓮ふいてうつくしき夜の面影　伊豫　米年

ちら蓮と咲ぬ名残の行末　紀州　北映

白蓮や花のあるひの池の面　宇橋

蓮の葉こゝ本まつて音のまとうか　信濃　多人

蓮花多や池のこゝろ路みえそむる　甲斐　孝九

さゝひ[illegible]身ふ立て蓮ひらく　大坂　米堂

蓮の葉や塔のうら見て数[illegible]　出羽　堂橋

蓮花ゆこすうる月を出し　岸居

蓮の花の蓮の葉の盛る月哉　紀星

仏[illegible]ゝ[illegible]ゝ林ゝ[illegible]　出羽　太橋

蓮の葉あけ初のゝ夜ゝ[illegible]ける　夢笑

## 彩春塚

千住小塚原天王の表ゝ[illegible]文政三年[illegible]建之

蕉翁彩樂の像を彫巣兆ゝ画勝翁ゝ書す[illegible]

## 花見塚

本郷元町昌福寺あわ寛政八年如月十二日
安長建之

## 蘰塚

紫野実性寺文政中寛政中扶風三世採茶菴
梅人建之

文化十一年七月於佐高無形

宇橋

市人の袖とまとまてそなれそめ　成美
もとのあつまる春の月　袁丁
山崖の篭りの風と春ちりて　素琥
鄙化やうらうねの外　芝山
ふるさとを忘しやわし春の毛　梅壽
陽炎の笠のうねやう　古民
なとしるこそ男れうらあしく

砂や藻屑を洗ふ山嵐　雪笠
ちのこゝろ孔雀の尾の羽根の花　尾人
ひのきこゝをゆきこゝをゆきこゝ　文臧
盃を林のむこうとうすし　雪
子鳥の鳴うに早稲うきたる　伯兮
由良山をよけてうの井曲　一峨
門宗の法とゆきつのもてなす　諫園
渋柿を赤ぬれ中まいりこみて　丁
美

一條殿ぬ於て詠のる　橋
花の苗古きこゝろの子供つり　臧
藪ぬまうとう木ぬ蛍とわの来る　人

## 雪塚

関口臺町蓮華寺ゆ移り寛政五年十月十二日現
住上人白眼臺雪才建之

# 若荷塚

小日向若荷谷明照寺にあり元禄の都蕉翁の
堂碑多くといへども此碑のみいまだ一を
うしなはざるなり字体古雅にして石形
まことに貴重なる存在を賞せらるべき寺破
れ傾かんとして枯木寒しく空をさすのみ
此碑のみ古人をして武真をして
丁寧を尽さしめたるの塚蕉翁の門人の尼宗主の
名をとどめたるものよ霊山名称の日に

あらんまはりはてをこの石碑
若荷の塚魂をとどめむとするかな

鶯の声や蕉翁の人汲こなす　護物
なもしれぬ水をかけ参ひ　但馬
ゆりとなる蕉翁しの佛達　尼素月
法印の碁打ちの蕉翁　老博
なりてこの世の蕉翁の上　小春　星谷

とゝひとゝを後ますす蔵たる乳　菊鳩

木りしの家ふちの神を義やゆず　お換　雄也

紫を京一ものもきし月夜の影　すき

こかしを雪のかすりや猫の猫　松頂

ふりしやなくくも元る春松た　得号　夕村

まだの百こ通らぬ命の乳の影　鈍る

松放を志野人形りし神世界　絹歌　芋弦

えりものの数外らねとぬ枇杷の花　大坂　谷鳥

京　月　塚

雑司谷鬼子母神出現所文化中景山

宗周建立の境内滝の泡地色竹

京のゝ栖外るゝ心の影本立　播广　巴山

手書やものいの所の所の所　紫静

書の書やたく遠ゝ徹る一寸　青竹

るとゝ外りゆゝ書の竹しゝ　播广　脱員

信濃新町きの海とりて

名月堰

雑司谷本浄寺にかりの明和九年秋白兎園
宗瑞三代教恵のしあををこたとして

雲林のいとう近くてる秋月　伊勢　丘高

夕顔の待ぬ人をうらなきの月　洗古

物思ふ人をなぐさむる秋の月　越後　吟糸

はたち月や海の二筋をかすて出し　下総　暮峰

名月をまつひろ野の月夜かな　和孝

名月や白いめしつる牛はなし　但馬　多い

名月や藤て居りたる男れ夜　陸奥　玉之

名月やとろろ汁をかけるより　淡路　無雲

名月の香を海の外に松を学　秋兎

名月の京ゆしてをまつら　女李江

名月やとろろ汁と水れ酒　但馬　素外

月みてはの相皆ゑてそゝみ月　播磨　ぬ　筵
ゆ〜きまの降すすもんそ月　甲斐　嶺外
月よりそんてのの住家を風まち　但馬　月波
そうんてまをうたるぬそこの月　伊勢　海志丸
旅心はいてあそこやけ〜月　甲斐　有斐
百九月雲の嵐をとうう〜き　可丸
十五夜のは役りすめそ夜の月　陸奥　壹山
古にのまうたかき月見くの　老赤　月化

をりしを月秋のて出すそきぬ　おや　おちち
まんて花まえ雲をはつる月ようふ　大坂　未木
いとのは秋平よ月て月夜の乳　甲斐　湾〜
うたう記夜まるて白九月　出羽　池考

## 梅香塚

雑司谷御嶽宝城寺あり安永六年十月十二日
一窓下梅者門人小建之

富士見塚

富田新田不二見坂ノ内あり

翁塚

鎧渡龜李院墓中ノ内ノ内ノ本廟墳墓の記

仁枚幸生の子芳ふいん鎧のわすれ龜ん せと翁

此碑の鎧為李院の園中ノ内ノ内ノ内ノ鎧
塚といふ所ノ今の龜為北為行為礼と小名を
よびていまし一の名をうきうり又此ノ内ノ内ノ
むかしは西湖縄手といふ所ありしの
いまの築地となり市庭軒を並へ家むりし
ところにはるかに此地の字をいまも縄手
と呼ひよりひの波しとて橋をもうけ民いまへ
の名をなこりわ李院の家の龜為塚といふ
ところなまと古名をとりてもうしくまに八彩ね
ましまつりたるあるこむう

幸生八李院の男也称仁叔五郎左衛門尉
都市尹綺士也

## 椎塚

千駄谷仙壽院のあわ寛政十二年家元園門人
宗宇より所望五台橋寺迄をゝつ雪中櫻花多く
堂前名花ゆり柴の山斧若と称す此山日蓮聖の岩窟
ゆりよりて信り新日ゝらしとゝいふとをゝゆゑ
あらとて拾ひ置を祖父ゝる事をゆるとゝとの

## 富士塚

渋谷宮益町御嶽山中に有り文化八年五月
栗庵宇橋社中建之

玉屑

ゝゝ行北ゆくゝ青田のそよぎ哉　祥草
山ゝと尾根ゝくゝ新蕎麦
旅人と為のるゝらゝ月消て　宇橋

あきのゝ[illegible]とかしと哥

牛乳酸ぬるを[illegible]豚の[illegible]ゝ　葉尾

松あるふるゝに窗れてらゝ　梅

## 櫻塚

渋谷金王社前にあり文化中大白堂門人山奴社中
建之碑也　金王とらとりの名花なり

## 一葉塚

青山原宿海藏寺の垂中にあり元てゝ
文化十四年五月淇園建之

## 梅月塚

青山墓眼ちにあり寛政五年光堂冬映旬
樹庵五陵建之塚のかたわら名桜あり地をしめ
[illegible]車湖く三尺ゆ[illegible]九二十余丈[illegible]
[illegible]ゝ俗名[illegible]桜の寺とゝ

歌仙

はつ霜や本屋り掃除はゆきわろ　みち長
蒐集をたのく思ひ立ける　宇橋
弓袋よりえび稚名の旅たまて　護物
雲れすしろふ山の紫　芝山
大根の葉とる日やはら毋　確嶺

雪はゆるのやく毋　はな光
鳴る戸の風はかとしく古すまて　魚連
豆日ゝ新解の田樂をすゝ　蓼笠
淡雪のかとし蔵物のあと　橋
魂よむとるゝく洗る花入ち　伊吉
そやきまて吃のうるゝの赤毋まる　物
墨よやたき袖の九ゝ　芦
板ゝ足ゝるゝ月花水の影　笠

ねねのうけるを見て死す学　兎
古墓れをの牛ま藤氏林う　炭
とうきうんの定いすれ子　林耳
ちる花の紙すく里を金百宮　山
於暗ぼうわひと花まゆく　薬静
西行のうらあまとるみ見　橋
あやまきまてうまの高見　糸眼
乙姫んとあるる精れかのみう　長

白より紺うきいあとうか　炭
なる色めしひこの奥れ居る月　静
林水ときの鮒まれうま沢　物
ものの形らみ鶴を礼を春て　山
猿人いまあかの金澤　五友
棟あれの保居寺ふうある　兎
すくまたれをまき十月　亀丈
あんとくみのとうるうら兎定　五柏

こたへ松まふまを風ぞ落ちける　耳
大助の盃ありてまゐるとき　友
永の揖面和らぎ笠に寄　稽
たゝまをすゆるかなを鈴なりけ　昳
巻まをたゝまを　可盈
此まを已よりてに山の紅葉と
宇稽老人をとりまをする
宿院者の若湯を和泉まを　長

とりまをしらを撰ぶのまを　物

蓬莱塚

四台三光院よりの迎安永七年仲秋一昳唐眉月
社中ゑまを建ゑ蓬水を一度を見紙ゑる
こたへをいまを巻ゑわ

四方北巻ゑ巻ゑ巻ゑ巻ゑ　花川子
巻ゑ巻ゑ二月の巻ゑ　ほたを

[illegible]　萬嶽
[illegible]　仙骨
[illegible]　國甫
[illegible]　迦江　葛松
[illegible]　京　空
[illegible]　淡路　桃堂
[illegible]　陸奥　秋夫
[illegible]　迦江　宇洋

[illegible]　白甫
[illegible]　陸奥　一水
[illegible]　山峯
[illegible]　丸
[illegible]　京　空
[illegible]　上野　浦人
[illegible]　信濃　葊齡
[illegible]　陸奥　蓑南

秋の色うつる猫の毒　大坂　木光

門松を解のはてと思ふ哉　出羽　女英之

松ひけや墨うすくすりて雪まの雪　肥前　葉也

志賀の三井寺の鐘　女　ちよ女

夕の月を正月とやふ小村の郎　尾張　魂翁

かうらん貴族なめる睦月哉　松頂

まの春の月ふるなるゆ春の夕　佛外

花模口貴しれしめる郎　摂津　三津人

とう雪ふとてる殷よりまさ模哉　米花

月よ拾て紙ま八歳ふ紙ま　女　李江

まの雪のまは逝る嵐この郎　越后　梅里

牡丹ふ〜咲てまるれるかろ哉　蟻跡

とくよ出て形ろ新まち民まの月　葉静

まの月沂海車よ志むよ所　大坂　星譜

策を哉　沂ろ良まち沢　佐奥　雄渕

小ぶまよ屋る月のよまたまろ　丹波　武陵

初雪や降るのうれしさ見てこかな　義孝

雪毎に蝶とぶ日和　陸奥　世竹

雪のよし初雪の花　湖水

てらの鈴そこへとゝまれとゝまれ　琪園

なれ来て初めの雪のうつくしし　不崔

燕来る百日咲れ山あり　史千

元日やまてゝ安いも燕とも　個外　図列

雪の日やうたゝまうまうまうまう　秀松

雪の日さてもさてもさびしさよ　仙飄

雪花雨降りてうつくしき　川峨

初梅の雪のうつくしき小服と　万里

陽炎やふるまふのや酔さうな　有城

ふるさとを宿のあるむ雪ふる　宇格

夷の書を見やるひとり松植人　敬の　蕉堂

はるのくまとなりたる立ちうり　此旅

巣こかまの鳥人もて呼ばれけり　伏見　蕚街

逝日塚

幡谷莊嚴寺不動堂の前よりあり文化六年現住
無說建立ものの人名金谷一家の一英なり
しかるに寂命みなして寂きり

月のうちに出すや弥生のこの夕　伊豆　一飄
芝れ去れるくるる我ちるこの夕　五老
のこりとて去れる思ひ出ふくよ去　應之

小ぼんげとおもしろ去の涙とりく　乙良
去ちくれ去ふしてなるし雪解ぞ　柳也
白梅のとくるあるし雪こりあり　安藝　江戸
松蔭し堂あるし歩り三里　甲斐　定弘
豆なとの人見ゆるてはり急ぞ　因幡　大蕉
人中一ふの去て春秋なる辺りの　孤月
みず去あてるあるこの花めし去の水　京　甚成
去れの去ちこてるのはつ花ぞ　梅谷

山里は雪降り積りの菜汁なりけり　一茶

月の出の遅き山の端なりけり　大坂　魯隈

物ごとやらひの山越えて冷ゆる夕べ　濃川子

寒むしやく人の酔ふる酒の香　お横　淡水

鶏の声の鳴くや寒の明るうち　甲斐　芋鳥

寒の人とぬかるみ行くや月哉　隆英

寒の雲味噌たるし黄染うる　風牛

寒参り嫁入り縄を乗る　越中　北暝

一人居て寒さ忘るる田舎うち　志摩

鶏も交まじえゆる田うちかな　木忘

稲荷宮寒の浅くぬる木間哉　菜静

うつて寒し因幡なまりの自気乳　丹后　似藻

外の花よ山ゝ降や毎の灰　伊豫　米年

菜の花や人と蚤虱　羽後　北尼

寒の天明やまこと在るうら里三里　田舎

二月やうまこなりて雪の高　筑後　文角

ちの花をたをりて雪の
旅ちよと宵らるるかな　旦翔
船の二星とりのぼるを見て　曲水
暑かし月の出てるひぼうるる　宇橋
月数ふる吟ふるやすのひとあ　京　金茉
家ゐとつ地てゐるれる月　紫絅
まの月夜ゐてゐるあるる　甲斐　大年
親とゐれ烟ゐ中や蛙ゐるる　但馬　埃雅

蛙ゐれ蛙ゐ毎ゐ蛙根ゐ　呉秀
吟ふ蛙てゐりもり蛙ゐやむりゐる　三河　宣長
きのこのを皆とゐりてゐるゐ　湖元
狐ゐを狐む山歌の角大師　茅
樵木の根ゐゐるゐや吟ふ月　伊賀　陶里
泥とゐ月ゐてゐ蛙月ゐ　玉亜
吟ふゐゐゐの月場のゐゐ竜　加賀　平
こゐりてゐの蛙きく　松越　信濃　惟平

落しとに花のかゆく月日哉　安芸　萬花

花ゆゑ秋のうゆく弱蕣の山ゐけ　三河　秋蓉

はつ雲のはたいるとき咲すゝのの　太郎

## 泊船堂

發洌泊船寺に於て文化十四年十月再奥外ノ此時

本願みうゝて栗津の正風堂をうけ

寺主の日當寺中奥二世子巖坐元八云心

無欲の老漢ゆゑ志厚の物を喫し醉

きるの花て檀林の夕調をうゝて心なやる偶

桃青ゆ遂て浴日矣終倦いろ外ノ旧記ゆ

みえてうゝ偶延宝七年未十一月廿日義

中人一偈を感得す

六十余年混世塵　義中不改養殘身

不来不去是何物　二月花開南國春

ゆめとえてりすまにてきよりえゆ世偈を唱ゆる

れゆ作ゆ外ノ翌三年の歳旦ゆ

ゆきりいたゆうやさるれゆ

とりの出しらえのうの二月やまひゆ廿四日

奄然として偈寂す年六十四一寿事といへし
其の年新著聞集にのせられし茱石ことを
かゝりしにはべらに此ころ土佐の何某の法数の子
とよみ巖師の肖像一枚を得たりその讃に
以て白このその像画讃と書に肥後国日出の
城主君臣俊某の筆にして元禄五年二月現住
宗俊のためにみ染毫なりとこそあれ此俊長
は是長嘯子の舎弟延俊の子俊治乃嫡にて
内蔵頭といひしもまへし宗俊は老己子巖の嗣子
にてすぐれる雅気ありきとなむ又牛耕菴
といへる別室を作りて墨画の祖翁の肖像を
なりよ竊れたるとあきらかにしるして画像のあれより
ところ誠に不可思議のみとつたへ語りもてけれ

## 古泊船堂之記

さても寛政五年十月十二日芭蕉翁百回の祥忌に
あたりし年に石河積翠子の厚志によりて
彫刻ありし肖像を贈られ是に古調庵太白堂を
して蓬山子ならびに呉楼文成ともにそくの
泊船寺にゆかりあるとて牛耕庵の旧地をおさめ
其ほかにその墨画の肖像を与へしとてさて

あはまとあらんをそてゝ水殺んをとてやゝて其地中ゝ納め
そのうへゝ一字をいとゝ丹ゝ書りきそりし此地や東街
北導所ゝうて往来絡繹のとろゝ所く霊宗の物ゝ系ゝ
似て結房の二列波みうつゝき士花の両嶽をみそひゆ
商舶子帆豆蔓をきあゝ漁火万點淡夜ゝ
ゝきて保川の旧巷ゝ紙てもつゝ一それを泊船の
号をもてゝ和ゝ和ゝ所ゝ所ゝ霊ゝ所ゝ翁の風魂ゝ應
すゝきゝ物のうゝ心ゝ所ゝ心と考ゝ主官嶽
寺表を尊師ゝて社会ゝそゝ所ゝ所ゝ会延を
設け紀のゝ巷休ゝ所ゝ日ゝ主ゝていゝこの
夢水の心を尋ゝ作られえ

## 納経之序

泊船堂ゝ三ゝ成及いゝやゝ所ゝ丸会れいゝ
ゝ傲ゝ祖義報恩のゝゝ法ゝ部の妙経を
納めゝゝといゝゝ一切の諸経ゝ信れ一家ゝ
ゝ所ゝとゝゝ所ゝ人の出寄ゝ元ゝ家ゝ
ゝてゝ所ゝて重保ゝ月清集のゝく月ゝ
十二日毎ゝ橋老人と共ゝ像前ゝ梅ゝ
ゝゝを所ゝ所ゝ養家て堂中ゝ納ゝ
ゝゝはゝゝ中より十二日所ゝを所ゝ

為きとりて拙歌辭言を究竟信一の
因孫とする好きこゝろとねがふものゝ

雪水軒

梅折てゝ手すさびとなれる嶺こゝの郭　菜静
と花櫻日ゝらくて消ぬ雪　宇稽

此鳥のなくこゑまでてゝ来ぬるかな
業平の墨染の袖を
まのゝ入の護国ちの御業いとの答を
添ゝるこゝ遠ゝとの彼岸の入の納
こゝ本ゝ

櫻の芽ゝ出ゝ彼岸のそらゝ　菜静
涅槃会や海を本の百ゝ菩提墨ゝ　宇稽
親鸞の彩筆ゝ木のまゝゝ　菜静
四ゝ松ゝ人ゝ登てゝ日の出ゝ　宇稽

中長宅寺ゝ
松ゝと胸をとゝき
五條の三位ゝ潤ゝ
再ゝ
ゝ

鶯鳴ゝてゝ人ゝ
ゝ　菜静
ゝ牡丹ゝ　宇稽

比叡をのぼりて人の袖をしぼる白雪　菜静

見る花のあさきまことをわすれ雪　宇楷

すゝしさやはなの心のあるかぎり　菜静

雪のうちの物ゝ枯れ行く菊

見ぬ所なくとんぼうの

物こゝろまてゝみの尾のうち

おもて清水の流南のもゝ張の音

楽こゝ流のうち出るくゝとつるく

ゝ雪のうちの菊一茎白

ゝ雪のうちの人を芝の野てゝ　宇楷

山寒やゝ人を芝の野てゝ

雉の尾の水摩くゝ寒や星の宵　菜静

後の世を先の月の翁て爾麓盃　宇楷

を月の入ゝ雪の日おくとゝらむく　菜静

比叡の雪の夜ゝ寒ゝ

ゝ住仏ゝ寒ゝ

ゝ後の雪の和尚を

見ゝ雪ゝ

神屋の夫ほうりてゝ山のゝ　宇楷

[illegible]の日の吉ひてしるしるせこの紙　菜静

[illegible]山桜なる色の日もなきあ　宇格

[illegible]

詠　不去不来心

[illegible]

泊船堂再建供養のとき　菜静

[illegible]の貴孔九たちら　宇格

[illegible]ふたき[illegible]の元　〃

[illegible]の柳を義[illegible]り　菜静

[illegible]南[illegible]流[illegible]　〃

[illegible]夜のうちの出書より　宇格

文政五年壬午九月

雲水軒茶静　校